

金属板固定手術が増加

手首の骨折(橈骨遠位端骨折)は、肩の付け根や股の付け根、脊椎の骨折と並んで高齢者の四大骨折の一つに数えられる。国内での発生は年間10万件以上とみられ、高齢化の進展で年々増加している。治療は折れた骨のずれを戻してギプスで固定する「保存治療」が一般的だが、重症度の高い粉碎骨折や、早期の機能回復を目指す場合は手術が選択される。この10年ほどの間に「ロッキングプレート」という手術法が飛躍的に進歩し、実施件数が増えている。

高齢者に多い手首骨折



名古屋掖済会病院
渡辺健太郎部長

昨年3月、70代の女性
が名古屋掖済会病院を受
診した。前日に旅行先で
転倒し、体を支えようと
右手を地面についたこと
で、手首が折れてしまっ

早期のリハビリが可能に

たという。現地の病院で
ギプスによる応急的な治
療を受けていたが、エッ
クス線撮影とコンピュー
ター断層撮影(CT)で
詳しく調べると、骨が数
カ所にわたって折れる
粉碎骨折で、ずれの程度

キングプレートという金
属板で骨折部を直接か
つ強力に固定する手術が
行われた。手術は1時間
足らず。1週間入院し、
3日目からリハビリを始
めた。6週間後には痛み
が消え、関節の動きもほ
ぼ正常に戻って完治し
た。

が、比較的若い年齢層で
は素早く手で体を支えよ
うとするため手首を骨折
する」と解説する。
通常は手のひらを地面
につくため、手首の関節
は手の甲側に倒される。
瞬間的に骨の強度を上回
る体重がかかり、骨折が
起きる。折れた手首を横

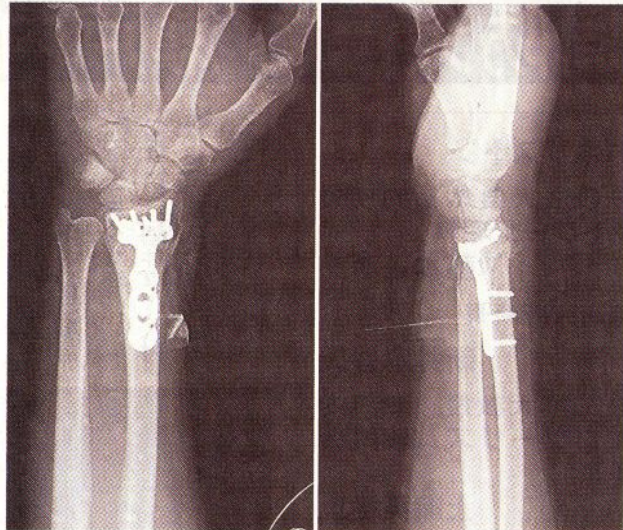
も大きいことが分かっ
た。
診察した整形外科の渡
辺健太郎部長は、折れた

年齢を重ねると骨は次
第にもろくなる。特に閉
経後の女性はその傾向が
顕著だ。一方で、運動不
足や体重増加、膝の痛み
や変形により転倒しやす
くなる。両者が相まって
骨折の危険が増す。

60代がピーク

肩や股の付け根の骨折
は80代以上の患者が多い
が、手首では60代に患者
数のピークがみられる。
渡辺さんは「転倒したと
き、活動性の低い超高齢
者ではとっさに手が出な
いため肩や股関節を打つ

から観察す
ると、食器のフ
オークに似た、
波打つような変
形が見られる。
「時間ととも
に痛みや腫れが
増していく。し
かし、素人療法
で手を引っ張る
のは危険。でき
るだけ早く、整
形外科の外来を
受診してほし



右手首を骨折し、ロッキングプレートで固定する手術を受けた70代女性のエックス線写真。正面方向①と横方向から撮影(渡辺部長提供)



ロッキングプレートの製品の一例(ジョンソン・エンド・ジョンソン提供)

安心・安全

結ぶプロシエクト

い」と渡辺さんは話す。

治療の基本はギプスによる固定だが、元の位置に戻した骨が、完全にくっつくまでに再びずれてしまうことがある。少々のずれなら後遺症は出ないが、ずれが大きいと痛みやしびれ、運動制限などが生じる。ギプス装着中に関節がこわばり、握力が低下する問題も。何より日常生活が不便で、リハビリの遅れから回復にも時間がかかる。

ずれ生じない

一方、手術にはいくつか種類があり、最近では2000年に国内導入されたロッキングプレートを用いる方法が主流。ゆるみにくい特殊な構造のねじで金属板を骨に固定するため、ずれが生じず、術後早期にリハビリを始められる利点がある。

金属板はチタン合金製で、金属アレルギーがある人にも使用でき、骨折が治った後も取り除く必要はないという。

「保存治療が中心であることは今後も変わらないが、粉碎の程度が強い場合や、骨折が関節内にも及ぶ場合は手術が必要。また、独り暮らしの高齢者など、一日も早い機能回復が求められる人も手術が有力な選択肢になる」と渡辺さんは話している。